

## 問診による簡易的な栄養スクリーニングの有用性についての検討

桑名市民病院 看護部・NST<sup>1)</sup>、薬剤部・NST<sup>2)</sup>、栄養室・NST<sup>3)</sup>、外科・NST<sup>4)</sup>

岡 寛巳<sup>1)</sup>、久留里子<sup>1)</sup>、近藤かな<sup>1)</sup>、中村知佐子<sup>1)</sup>、松岡由美<sup>1)</sup>、  
水谷久美子<sup>1)</sup>、森 弘美<sup>1)</sup>、伊藤秀範<sup>2)</sup>、土江絢子<sup>3)</sup>、寺邊政宏<sup>4)</sup>

目的：栄養サポートチームによる栄養管理の第一歩として栄養不良患者を抽出する必要がある。当院では簡便に誰でも短時間で施行可能なものとして、(1)食事量の減少、(2)体重の減少、(3)身体機能、(4)浮腫と褥創の有無、の4項目の問診による簡易栄養スクリーニング票を使用している。各項目2点満点で合計8点、6点以下を栄養不良の可能性ありとしている。この方法の有用性をみるため、スクリーニング点数(以下、点数)と栄養パラメータ、患者の転帰との関係について検討した。統計学的処理はMann-WhitneyのU検定、2乗検定を用い、 $p < 0.05$ のとき有意とした。

方法：対象は50歳以上の内科入院患者で点数により6点以下と7点以上の2群に分けた。アルブミン値、Body mass index、入院期間、予後との関係については2004年入院のうちスクリーニング票が完全に記入されていた456例を対象にした。また、2名の検者が連続する50人の入院患者の上腕三頭筋皮下脂肪厚(TSF)と上腕筋周囲長(AMC)を測定し、JARD2001による平均値から%TSF、%AMCを算出し検討した。

結果：点数は6点以下215例、7点以上241例であった。アルブミン値は6点以下群で $3.44 \pm 0.65$ g/dl、7点以上群で $3.90 \pm 0.56$ g/dlと有意に7点以上群で高値であった。BMIは25以下の例で検討し、6点以下群で $19.1 \pm 3.2$ kg/m<sup>2</sup>、7点以上群で $20.6 \pm 3.2$ kg/m<sup>2</sup>と有意に7点以上の群で高値であった。入院日数は検査入院、教育入院、短期の経過観察入院例を除き検討し、6点以下群で $34.7 \pm 32.7$ 日、7点以上群で $20.8 \pm 16.9$ 日と有意に7点以上群で短かった。予後は転院などで転帰不明のものを除いた442例で検討した。死亡例は6点以下群で207例中34例、7点以上群で235例中8例と7点以上群で有意に少なかった。%AMCは6点以下群で $95.9 \pm 14.4\%$ 、7点以上群で $104.9 \pm 11.6\%$ と7点以上群で有意に高かったが%TSFに有意差は認めなかった。

考察及び結論：4項目の問診からなる簡易栄養スクリーニングは多くの栄養パラメータや予後と関連し、十分な抽出能力があると考えられた。